

フォルモサの原風景

いよいよ10月7日(土)から国際交流展『台湾鉄器文化の粹(すい) 新北(シハイ)市 十三行(シサンハ)遺跡と人びと』が開幕します。本展示会では、台湾北部鉄器時代(約2,000年前~400年前)の指標遺跡である十三行遺跡を取上げ、十三行遺跡に生きた人びとの生活や精神文化をご紹介します。また、彼らの広域交流を示す多彩な装飾品などを展示し、その生活や文化の特質について迫りたいと思います。

十三行遺跡の資料は1955年に遺跡が発見されてから、実に60年以上の月日を経て、ここ西都原の地において海外で初めて公開されます。恐らく、多くの方々が初めて目にするであろう美しい資料の数々は、「麗しき島」台湾を想起させることと思います。

この「麗しき島」という言葉は、16世紀の中頃、ポルトガル船が台湾付近の海峡を航行中、船員がその島影の美しさのあまり「Ilha Formosa!! (イラ フォルモサ)」(ポルトガル語で美しい島の意)と叫んだことから定着したとされています。

台湾は、17世紀まで国家や王権が誕生することなく先住者による鉄器時代が永続していました。恐らく、当時のポルトガル人が見たかくも美しい風景は、台湾鉄器時代に生きた人びと自然がおりなす風景であったと推測されます。

本展示会でご紹介する様々な資料は、十三行遺跡そして東アジアや東南アジア、南アジア史という枠組を超えて、皆様の記憶に残ることと思います。また、展示期間中の10月28日(土)には臧振華(ツァン チェンファ)氏(台湾 中央研究院院士)を講師にお招きし、十三行遺跡についての講演会を行い、11月18日(土)には村上恭通氏(愛媛大学教授)をお迎えし関連講座も行います。展示会と講師の先生方のお話は、きっと「麗しき島」と島を取りまく様々な歴史の解像度を高めてくれることと思います。

この秋、是非西都原考古博物館へお越し下さい。フォルモサの原風景がここにあります。

(沖野 誠)

※展示会についての詳細はHPをご覧ください。

<http://saito-muse.pref.miyazaki.jp/web/images/event/H29年度/H29国際交流展チラシ.pdf>



十三行遺跡にほど近い淡水河(タンシュイ河)の河口から見える風景は、まさに「麗しき島」と呼ぶにふさわしい風景が広がっています。

(写真: 新北市十三行博物館提供)

